
かえりみち

峰岸しおり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かえりみち

【Nコード】

N5244B

【作者名】

峰岸しおり

【あらすじ】

いつまでもきえない強い存在。現実を生きる『私』と、過去を生きる『私』の日常。いくつもの『かえりみち』を歩きながら、過去のなかで迷子になってしまった三十代女性の不安を描いた短編小説。

ああ、どうしてあのひとの声は、こんなに私をふるわせるのだろう。きつと声だけじゃない。あのひとの存在自体が私をこんなにも揺さぶるんだ。視線、指先、心臓の音。髪のおい、まばたきの音、息づかい。それらのどれか一つでも私の体は、なにひとつとして、とりこぼさないように、注意深く、それでいてだいたんに感じとうとする。はずかしいとか、躊躇とか、余計なものは必要ない。私にとって必要なものは、あのひとの存在だけなのだ。

私はひとりが好きだ。好んでよくひとりになる。ひとりでいるときの私は誰にも属さずに、うまいこと生きていける気がするからだからといって実際にひとりでいる時間は、他の孤独を厭う人からすれば格段に多いかもしれないが、四六時中ひとりで生活しているというわけでもない。ときには、友人と食事にいたり、家に招いて映画を観たり（ほぼ毎月のように家で典型的なハリウッド映画のような頭をからにして観れる映画を友人たちと観ている）、また、恋人と週に三度はセックスをするためにビルのようなホテルで「休憩」をしたりもしている（お互いに自分の家に招き入れることを嫌うためだ。そのうえ、宿泊をすることも滅多にない）。私の好む「ひとり」とは、たとえば、電車のなか。満員電車の中でひとりになること。たとえば、友人との食事中。会話を「聞いている」ときにひとりになること。たとえば、恋人とのドライブのあいだ。お互いに何かをしゃべろうとはせず、ひとりを共有すること。私はこういった矛盾のなかの「ひとり」の時間を、半ば自嘲的に愛している。今朝も「ひとり」で電車に乗り、会社のデスクワークを「ひとり」でこなし、昼食を友人と「ひとり」でとった。今もこうして「ひとり」、恋人と四角い無機質な部屋の、これもまた無機質なベッドを

共有している。

私のお世辞にも華奢とはいえない、むしろふつくらとしたまるい手首にまかれたセイコーの腕時計は午後十一時を指し示している。二十四歳の誕生日に母が、ふいに贈ってくれた腕時計だ。そろそろ家に帰ろう。今日は二日間、延滞しているDVDをレンタルビデオショップに返しにいかなければ。私の左側で煙を吸ったり吐いたりしている物体を、生き物であり、ひとであり、そして恋人だと認識するまでに約二秒。ああ、そうか。たった今、この人と体を重ねていたのだ。ふふっ、とすこし笑ってから「ねえ、そろそろ帰ろう、DVD返さなきゃ」と伝える。飾り言葉は必要ない、恋人も同じように思っているはずだ。「わかった、帰ろう」と短く、でも決して無愛想には響かない声で恋人は答えた。ああ、このひとのこの声、きらいじゃない。

私たちはたったの一时间と少しの情事を早々に済ませて、無機質な、だけど清潔感だけはある（そこを気に入って、恋人はここをよく使うが、私は逆にいやらしいと感じる）ホテルを後にした。

私たちはオレンジ色の電車に乗って恋人同士のふりをした。もともと恋人であるのだから恋人のふりゲームは、やはりおかしい行為なのだろう。でも、私たちは電車の中、公共の場とでもいうのか、そういった類の場所ではきまって恋人同士のふりをする。どちらから言いだしたことなく、ただ、自然と決められたルールだ。さも、長年連れ添った恋人、あるいは同棲カップル、ひどいことには夫婦のように私たちはふるまう。落ち着いた、無理に会話を探したりしない、大人の恋人たち。向き合って、でも見つめあうわけでもなく、でも決してつまらなそうでもない、うわつかない、大人の。うわつかない、という言葉は私を安心させる。うわつく。ただっ広い海の真ん中でぶかぶか、うわつくなんて。こわい言葉。うわつく、という言葉を、しかし、恋人はよく使う。うわついたひと。う

わついたきもち。うわついた声。私はそのたびに、だだっ広い海の真ん中にぶかぶかとうかんでいる、ひとのかたちをしたものやら、気持ち（肌色をしたハートのかたち）やら、声を（この時、私はあのひとの唇を）思いうかべるのだ。ひどく、おそろしい、心細い想いで。

恋人を残して私は四つめの駅で降りる。最高の笑顔と一緒に。またね、じゃあ、ばいばい。オレンジ色の箱の羅列から降りて、階段を駆け上がると、改札は人々でごったがえしている。酔ったひと絡み合う男女。行き場のない老人。全員に彼らの人生があると思うと未恐ろしくなる。彼らにも私が歩んできたものと同じくらい、いや、もっと濃いかもしれない時間が存在するのだろうか。こういったひとごみの中にと、私はいつも時間の強引さと圧倒的迫力と、そしてここにいるすべての人間の意識と記憶の波に襲われた気分になって、めまいにも似た、かなしさでいっぱいになってしまふ。もつと、みんなしあわせに生きてはいけないのだろうか。

いまの恋人とは知り合って九年になる。恋人は私をいつも待っていた。そしていまも待っている。

家までの帰り道、フーデックスに寄る。牛乳、じゃがいも、チーズ。食パン、ハム、微糖コーヒー。私は牛乳を飲む習慣はなかったのだが、あのひとが飲むのであるべく飲むようにしている。チーズも滅多に食べない。炭水化物は摂らないようにしているし、コーヒーはブラックだ。ハムは私の主なたんぱく源である。

自宅に着くともう十一時四十分。急いで借りていたDVDをつかみ、部屋を出る。レンタルビデオショップは家の近くにあり、あのひととよく通った。毎週新作をひとつと旧作をひとつ。私の部屋の橙色のクッションをふたりでうばいあいながら観た映画たち。映画の内容が重要なのではない。映画をふたりで観ることが重要なのだ。

ふたりでわけあった映画。ラブロマンス、サスペンス、ホラー、コメディ。私はいまもあのひとと観た映画はすべて覚えている。タイトル、役者、監督、ストーリー。いま持っているDVDのタイトルすらよく思い出せないというのに。

DVDを返してから、煙草を吸いながらマンションまで歩く。ヴァニラの香りなんかまったくしない。するのは煙のにおいだけ。近くを流れている用水路をのぞきこむ。夜の水はどうしてこんなに黒いのだろう。まるで墨汁みたいだ。すこし、肌寒くなってきた風が墨汁の上に波をつくる。責められているような気がして、私は家路を急ぐ。そうだ、明日の朝食には微糖コーヒーにミルクをたっぷりとまぜたものと、焼いたハムをのせたトーストを一枚食べよう。賞味期限が明後日にきれる牛乳をすべて飲んでしまわなければ。静まりかえった商店街を足早に通り過ぎ、シャッターの閉まる音を背後に感じながら、何も感じないふりをして歩く。背筋をのばして大股に歩く。一番、女性が美しく、遅しく見える歩き方。たとえ三十過ぎの女でも、美しく見えるのだ。

ひどいことだとはわかってる。私には六年経つたいまでも変わらずにあのひとしか見えていない。あのひとの声や視線、指先、心臓の音を探している。髪のおい、まばたきの音、息づかい。ひとつとしてとりこぼさないよう、今も注意深く、そして大胆に。あのひとが別れをつげたとき、どうして私のからだ死ななかったのか、わからない。心はちゃんと、はつきりと、そして大胆に、死んでしまったのに。

恋人はそんな私を心配してくれている。あのひとと私がまるで狂ったように愛し合っていたときから、恋人は私を待ってくれていた。私はそれを知っていた。

はじめてあのひととあったとき、これは運命だ、ここから私の本

当の命がはじまるんだ、と強く感じた。大学時代に所属していたサークルの新歓に、新入生として入ってきたあのひとの、すべてに私の神経は集中した。それほどにあのひとのすべてが私の望むものだったのだ。とくに、そう、低い声。このひとの声の中で寝れたらしあわせだろうなと思ったほどだった。そして、あのひとと同じように思ったそうだ。私の髪に顔をうずめて眠れたら、と。

私たちはすぐに飲み会を抜け出して飲みなおした。歳は二つ私が上がった。あのひとは最初、私を「先輩」と呼んだ。そして私たちはセックスをした。お互いの体がまるでひとつになってしまふのに、さほど時間はかからなかった。とろとろとした行為だった。まるで本当にお互いの熱で溶けてしまふんじゃないかと心配になるほどの私たちは深く、深く愛し合った。次の日からあのひとは私の部屋で暮らした。あのひとの部屋はひきはらわせた。当時の私は今の恋人とつきあっていたけれど、彼に別れ話を切りだす時間すらもつたいなかった。そんな時間があるのなら、あのひとと一緒にいたかった。毎日が輝いていた。

一緒に暮らしていたとき、よくあのひとは道に迷った。オレンジ色の電車の中で、駅からの帰り道に、コンビにまでの道のりに、たびたび電話をかけてきては「道がいつもと違うんだ」と言った。そんなあのひとを痴呆なのではないかと心配し、病院にいくことを勧めたら、しかられてしまった。「あなたは心配が過ぎる。僕はひとりだって生きていける、大人なんだ。」

そして、別れは突然だった。一緒に暮らし始めてから一年と三ヶ月。あのひとは違うひとのもとへと行ってしまった。「ごめんね」の一言を残して。そんなあのひとを、恋人は「うわついたやつだ」と呼んで軽蔑する。うわついたやつ。それでも恋人は一年と三ヶ月私を待っていてくれた。あんなにもうわついた私を。

いまでもときどき、「ひとり」でいるとき、私が「誰にも属していない」ときに、夢のようにあのひとの姿があらわれる。デスクワ

ーク、お昼休み、ドライブ、性交。そのとき、いつもあのひとは道に迷っているのだ。もしかしたら私への帰り道に、もしかしたら他の誰かへの道のりで。もしかしたら迷子なのは私なのかもしれないけれど。

まがりかどをまがったとき、ふと懐かしいにおいがした。これという確かな記憶はないけれど、むかし、どこかで、確かに出会ったにおい。あまいような、湿気を帯びた、香ばしいにおい。そして認識と同時に無防備になる。いつもそうだ。なにか懐かしいものに出会うと無防備になってしまう。まるで電車のなかで切符をなくしてしまったときの感じ。ずっとオレンジの箱におしこめられて、息がくるしくて、でも外の世界から突き放されてしまった感じ。

すこし早歩きをしよう。はやく家について、あのひとの記憶とふたりで眠るんだ。

（後書き）

友人に勧められての投稿です。

どうしようもない物語かもしれません。

でも読んでくれてありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5244b/>

かえりみち

2011年1月27日12時14分発行